



Data	2022-7
監督:	リドリー・スコット
原作:	「ハウス・オブ・グッチ」 サラ・ゲイ・フォーデン
出演:	レディー・ガガ/アダム・ド ライバー/ジャレッド・レト /ジェレミー・アイアンズ/ ジャック・ヒューストン/サ ルマ・ハエック/アル・パチ ーノ/カミーユ・コッタン

👁️👁️ みどころ

“ブランド”にはあまり興味のない私でも、イタリアの高級ブランド“グッチ”はよく知っている。バブルの時代には、ド派手なグッチのベルトをしたり、高級ネクタイを締めたことも・・・。

日本では山口組の3代目の跡目を巡る“騒動”が有名だが、グッチ家でも3代目を巡って殺人事件が起きたらしい。しかも、それは“妻による夫の殺害”だからすごい。そのドラマは如何に？

巨匠リドリー・スコットはそんな興味でレディー・ガガを起用し、グッチ家を巡る「ゴッドファーザー」並みの叙事詩を目指したが、さて？

ここまでやるか！ラストに見るそんな“バカ女”の姿に私はビックリ！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□巨匠リドリー・スコット監督がなぜ今“GUCCI”を？■□

リドリー・スコット監督と言えば、アカデミー賞作品賞受賞作『グラディエーター』（00年）に代表されるハリウッドの巨匠。『オデッセイ』（15年）（『シネマ37』34頁）、『ゲティ家の身代金』（17年）（『シネマ42』172頁）、そして直近の『最後の決闘裁判』（21年）も彼の監督作品だ。このように、彼の作品は「歴史モノ」に限らず、「SFモノ」や「社会問題提起作」等と幅広いが、革製品を中心とする世界的に有名なイタリアのブランド“GUCCI”をとりあげたのは一体なぜ？

ブランド品にあまり興味のない私は全然知らなかったが、1995年3月にミラノで起きた、革製品で有名なイタリアのブランド“GUCCI”の3代目社長であるマウリツィオ殺害事件は有名な話らしい。しかもそれは、離婚調停中の妻パトリツィア・レヅジャーニが殺し屋を雇って強行した犯罪だったから、世界中の人々がビックリ。裁判では実行犯はも

とよりパトリツィアも有罪となったが、それは一体なぜ？ファッション界の憧れのブランドとして世界に君臨していた“グッチ家”にそんな事件が起きたのは一体なぜ？

リドリー・スコット監督はそこに注目したい。しかし、その後の“GUCCI”はどうなったの？弁護士としての興味もいろいろと尽きないが、映画としての面白さは如何に？

■□■豪華俳優陣に注目！こりゃ『ゴッドファーザー』並み！■□■

フランシス・フォード・コッポラ監督の『ゴッドファーザー』三部作（72年、74年、90年）は壮大な一大叙事詩だったが、同作で一躍注目されたのが、コレオーネ・ファミリーの2代目の首領になったマイケル役を演じた俳優、アル・パチーノ。コレ一族を統括するイタリア系マフィアのボス（ゴッドファーザー）役を演じたベテラン俳優マーロン・ブランドもすごかったが、同作では、若き日のカッコいいアル・パチーノの存在感が際立っていた。また、ヴィトーの若き日を演じたロバート・デ・ニーロもすばらしかった。

それと同じように、リドリー・スコット監督の本作では、『アリー スター誕生』（18年）（『シネマ43』40頁）で素晴らしい演技をみせた、本業は歌手のレディー・ガガと、『最後の決闘裁判』で中世の騎士役を演じたアダム・ドライバーの2人が主役になっている。『ゴッドファーザー』ではコレオーネ家の重要人物がたくさん登場したが、本作でもグッチ家の重要人物がたくさん登場してくる。現在、グッチ家の株を50%ずつ保有しているのはイタリアでグッチを仕切る弟のロドルフォ・グッチ（ジェレミー・アイアンズ）と、アメリカでグッチを大展開する兄のアルド・グッチ（アル・パチーノ）。つまり、『ゴッドファーザー』で見た若き日のマイケル役を演じたアル・パチーノは、本作では、パトリツィアに重大な影響をもたらすグッチ家の重鎮、アルド・グッチ役をユーモラスかつ重厚に演じているので、それに注目！

他方、『最後の決闘裁判』で中世の騎士役を演じたアダム・ドライバーは、『ゴッドファーザー』で若き日のアル・パチーノと同じように、弁護士を目指す物静かな青年マウリツィオ・グッチ役を演じている。しかし、パトリツィア・レヅジャーニ（レディー・ガガ）との出会いと結婚の中、彼の運命の歯車はどんな方向に？

■□■創業家の3代目は微妙な立場に！？■□■

私が毎日見ている中国歴史ドラマ『大明皇妃』では皇帝の3人の息子と1人の孫が次期皇帝の座を巡って抗争を繰り返している。日本の大企業では、トヨタの豊田章男氏が創業者である豊田喜一郎氏の血筋を引いた11代目社長。サントリーは5代目で新浪剛史氏が就任していたが、近々創業者たる鳥井信治郎氏のひ孫である鳥井信宏氏が社長に就任予定だ。他方、1代で巨大企業を作りあげたソフトバンクの孫正義氏やユニクロ（ファーストリテイリング）の柳井正氏等の2代目、3代目は？

そんな（興味本位の）目で見ると、グッチ家は2代目の兄アルドと弟ロドルフォが株式

を50%ずつ保有しているから、今は安泰。しかし、ロドルフォの息子マウリツィオ（アダム・ドライバー）は弁護士を目指しており、グッチ家を継ぐ気持ちがないから、グッチ家の3代目社長の座は誰に？ 順当なところではアルドの息子パオロ（ジャレッド・レト）だが、その力量は？

ところが、少なくとも本作前半は『大明皇妃』のような権力闘争を描くものではなく、とあるパーティで知り合った、活発で美しい娘パトリツィアとマウリツィオとのロミオとジュリエット風の恋愛物語になっていく。ロドルフォはパトリツィアが一族の財産を目当てにしていると反対したが、マウリツィオとパトリツィアの思いは変わらず、グッチ家の出席がないまま結婚式を強行したから若い2人はえらい。なるほど、なるほど。すると、以降マウリツィオはパトリツィアの父親が営む運送会社で洗車や車の修理をしながら、パトリツィアと楽しい家庭を。そして、グッチ家はパオロが3代目社長に！？そう思っていたが、アレレ、アルドがパトリツィアを気に入ったことによって、事態は急展開していくことに・・・。

■□■もう1人の3代目候補は？新たな模索と混乱は？■□■

中国のTV時代劇ドラマでは側室を含む妻や息子、娘たちの数が多いから、権力闘争を巡る人間関係は複雑になる。しかし、GUCCI家の3代目候補はマウリツィオの他はアルドの息子パオロのみだから、マウリツィオが跡を継がなければ3代目は自動的にパオロに決まり。パオロもそのつもりで、それまでのグッチのイメージとは一味違う新たなデザインを模索していたが、肝心の能力は？父親のアルドがパオロのことをあまり評価していないことが気になりだが、占い師のビーナ（サルマ・ハエック）の助言を得て、夫マウリツィオを3代目候補にしようとしたパトリツィアをアルドが気に入り、マウリツィオがアルドの仕事に関与してくるようになると・・・。

そんな中、ロドルフォが死去すると、何が何でも夫のマウリツィオを3代目に就任させようとするパトリツィアの行動（策動？）は次第にエスカレートしていくことに。それによって、元々仲が良かったアルドとパオロの親子関係が危うくなってきたのは仕方ないが、パトリツィアはパオロがもたらした“脱税”の情報を当局に通報したから、なんと、アルドが逮捕されたばかりか、次にはアルドがパオロを著作権侵害で訴えるという親子対決の事態に！さすがにレディー・ガガが演じただけあって、パトリツィアの決断力と行動力はすごい。

■□■妻の野望はどこまで拡大？夫婦間の亀裂は？■□■

しかし、グッチ家の株は死去したロドルフォとアルドが半分ずつ持っていたから、いくらパトリツィアが頑張っても、マウリツィオの3代目就任はアルドやパオロの了解を得なければ無理。誰の目にもそれは明らかだが、何とパトリツィアはマウリツィオがグッチ家の株を相続する際の署名の偽造まで決行！パトリツィアの野望は一体どこまで拡大していくの？こうなれば、マウリツィオとパトリツィアにも捜査の手が伸びるのでは？

他方、本作導入部に見るマウリツィオとパトリツィアの熱愛ぶりはロミオとジュリエット級だった。また、父親ロドルフォの反対を押し切ってまでパトリツィアと結婚したマウリツィオは、パトリツィアの父が経営する運送会社の従業員として一生働く決意を固めていた。ところが、予想に反してマウリツィオがアルドに重宝され始めたことを契機として、パトリツィアの“野望”が拡大していくと・・・？

そんな状況下、マウリツィオの前に登場してきた“第2の女”はかつての友人パオラ・フランキ（カミーユ・コッタ）。野心の強さではパトリツィアに及ばないものの、パオラだって相当な美人だし、それなりの成功者だ。“大人同士の付き合い”だった2人が“不倫”に溺れることはないはずだが、占い師ビーナの影響を強く受け、人が変わってしまったようなパトリツィアを見ていると、マウリツィオの心が少しずつパオラに移っていったのは仕方ない。しかし、今やパトリツィアへの愛などすっかり冷めてしまったマウリツィオは、パトリツィアとの離婚を決断することに。しかし、マウリツィオからそんな姿勢を見せつけられたパトリツィアはスンナリそれに同意するの？当然マウリツィオは多額の慰謝料を覚悟していたが、パトリツィアのような女がそれだけで満足するの？私には到底そうは思えなかったが・・・。

■□■ここまでやるか！こんな実話にビックリ！■□■

“グラミー賞”ノミネートの常連であるレディー・ガガの本業は歌手だが、『アリー・スター誕生』（18年）では女優としての圧倒的な存在感を見せつけた。そのレディー・ガガが女優として本作で演じた女パトリツィアが、冒頭から見せる“気の強さ”は相当なもの。マウリツィオがどの程度いい男で、どの程度将来性のある男と認識していたのかはわからないが、導入部での恋物語を見る限り、必ずしもグッチ家の3代目候補だから恋に落ちた、わけではなさそうだ。ところが、本作中盤以降パトリツィアがアルドに気に入られ、マウリツィオもその能力が評価される中で有力な3代目候補になっていくと・・・？

しかし、本作ラストに向けて、パトリツィアは怪しげな占い師ビーナとの執着を含めて、次第に権力に憑りつかれた“バカ女”になっていくわけだが、元々気の強い女だけに、それが徹底しているところが怖い。パトリツィアにしてみれば、「マウリツィオは自分に惚れているうえ、根が優しい男だから、何でも自分の言うとおりに従う」と考えていたようだが、“第2の女”パオラの出現は想定外だ。さらに、それによってマウリツィオがパトリツィアとの離婚を決意するとは一体どういうこと！！そんな直線的な考え方しかできなかったパトリツィアがその後にとった行動は、それがホントの実話だとしてもあまりに馬鹿げたものだ。ホントにここまでやったの！？

そう思わざるをえない私には、本作のラストに観るクライマックス(?)の展開とその後のパトリツィアの“裁判”シーンはかなり馬鹿げた“付け足し”になってしまったが・・・。

2022(令和4)年1月28日記